

朝日新聞（社説） 2025年7月27日

## 子どものスポーツ 「勝利至上」から脱却を

子どもたちの夏休みが始まった。酷暑への十分な対策とともに、スポーツや課外活動を楽しみ、深める季節でもある。その現場では「脱勝利至上主義」へと、大きくかじが切られ始めた。流れを滞らせることなく、加速させる必要がある。

小中学生を中心としたスポーツ少年団を統括する日本スポーツ協会（J S P O）は今年、この世代を対象にした大会のあり方を示す運営指針を新たに打ち出した。交流機会の充実、出場機会の確保、スポーツの品位や倫理の強化が、その3本柱だ。

交流については試合以外にも選手やチーム間で親睦を図る機会などを設け、出場機会については登録選手全員が出られるような独自ルールの方策を定める。品位・倫理の面では、フェアプレー賞の授与や子どもへの研修の実施などを定める。

それぞれの全国大会の名称は今後、「エンジョイ！」と「フェスティバル」の言葉を入れるという。

この取り組みは、8月上旬に開幕予定の軟式野球をはじめ、バレーや剣道など少年団の全国大会から本格化する。その後は、各競技団体が催す大会や自治体に関わる地域レベルまで広げる考えだ。

改革の目的は、勝利至上主義との決別だ。「ゆきすぎた勝利至上主義が散見される」との理由で、柔道が小学生の全国大会の中止に踏み切ったのは2022年だった。健康に影響するような過度の減量や、度を越えた言葉の指導が目についたせいだ。

心配なのは、勝利至上主義にはハラスメント行為との親和性が高いことだ。集団主義や上下関係の過度な尊重、指導者への依存、知識不足といった要素を媒介に結びつきやすい。大人の満足が、いつしか試合や大会のもの差しとなっている面も否めない。

昨年度1年間でJ S P Oの窓口が受け付けたハラスメントの相談は、過去最多の536件。指導における暴言が4割を占め、頭をたたいたり、球を投げつけたりする暴力行為を加えると5割を超える。

しかも被害者の半数が小学生だった。子ども本人が声をあげにくいことを考えれば、氷山の一角だろう。指導者の情熱を割り引いても、憂慮すべき事態というしかない。

子どものスポーツを守るには、指導者と保護者の意識改革がカギになることは間違いない。大会運営をめぐる改革によって、関わる人たちが知恵をしぼり、協働作業を高める意義は大きい。

子どもの祭典を、着実に子どものものにしていきたい。